

救急外来の家族看護実践の現状

著者	小越 優子
発行年	2016-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10422/11805

氏 名	小越 優子
学位の種類	修 士（看護学）
学位記番号	修 士 第 2 0 0 号
学位授与年月日	平成 2 8 年 3 月 1 0 日
学位論文題目	救急外来の家族看護実践の現状

論文内容要旨

※整理番号	205	(ふりがな) 氏 名	おごし ゆうこ 小越 優子
修士論文題目	救急外来の家族看護実践の現状		

研究目的：本研究では、救急看護師を調査者として、救急外来に来院した患者と家族を対象に、救急外来における家族看護実践の現状を明らかにするとともに、患者の緊急度による家族看護実践の関連を検討した。

方法：調査対象は入院ベッド数 500 床以上且つ、救急車搬送台数 150 台/月以上、且つ救急看護認定看護師が在籍している A 県内救急告示病院における、研究協力の得られた病院の救急外来に救急搬送で来院した患者と家族とした。調査者は患者を担当した救急看護師で、患者毎に属性と家族看護実践項目を「実施したか」、「必要だが実施しなかった」、「該当無し」の選択肢で回答を得た。分析は、調査者と解析対象者の基本属性、来院家族と来院時の救急外来の状況を記述した。解析対象者 258 名の家族看護実践項目をカテゴリー毎に、実践項目数の中央値を記述した。また、実施した割合をカテゴリー毎に算出し、患者の背景や救急外来の状況別に Mann-Whitney の U 検定と Kruskal Wallis 検定で比較した。各家族看護実践項目数を 75 パーセンタイルにより高実践群とその他の群として、緊急度（高い/低い）を独立変数とし、各家族看護実践項目（高実践群/その他の群）を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った。本研究は滋賀医科大学の倫理委員会の倫理審査を受け、承認を得た（承認番号 26-140）。

結果：調査期間は平成 26 年 4 月～9 月で、5 施設で実施した。調査者は救急看護師 56 名で、解析対象者は 258 名だった。救急外来の家族看護実践の高いカテゴリーは「環境調整」「情緒支援」「情報提供」次いで「信頼関係の構築」であった。家族背景別は、「処置中に来院した家族」、来院した家族が「子ども」の場合、来院家族の人数が多い場合は、家族看護実践項目が多かった。救急外来看護師数が 3 人以上の場合、救急外来医師数と救急外来事務員数が 1 人以下の場合、家族看護実践項目が多かった。緊急度が低かった患者に比べて緊急度が高かった患者は「環境調整」「情報提供」の高実践群のオッズ比が 2 倍と高かった。また、救急看護師が 2 名以上いる場合は家族看護実践の「環境調整」と「実践項目の合計」も高くなった。

考察：救急外来で実践項目数が多かった項目は、「環境調整」だった。これは、先行文献とは相違する点であるが、救急外来は療養の場ではなく、処置を優先する場であるため、家族が面会する時の環境調整の必要性が高くなるからだと考える。また、時間制約のある救急外来で、実施が容易に可能であり実践項目も多くなったのではないかと考える。患者の緊急度や家族の来院状況によって、家族看護の実践割合に有意差があり、救急看護師は、患者の状況に大きく影響を受ける家族のニーズに合わせて実践していたと考えられる。

総括：救急外来の看護師は、緊急度が高かった患者において家族看護の項目で「環境調整」と「情報提供」を多く実践していた。救急看護師が複数の場合は、家族看護実践項目の「環境調整」が多く実践されており、「実践項目の合計」も多かった。

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。